

平成 19 年度学術ポータル担当者研修レポート（東京海洋大学）

2007/11/13 提出

受講者番号：3-1 神戸 美幸（附属図書館学術情報係）

受講者番号：3-2 馬場真紀子（附属図書館分館学術情報係）

（1）発表資料の状況設定

教員の研究室を訪問し、数名の教員に学術雑誌に掲載された査読済み論文のファイル提供と今後の協力を依頼する。

（2）発表内容抄録と研修当日の講師からの助言、及び研修発表との改訂部分

①内容抄録

本学では、昨年度、大学の事業としてリポジトリを立ち上げることを決定し、各学科会議の席で、リポジトリや本学リポジトリ「OACIS」の概要をすでに説明している。今回のプレゼンテーションはそれを振り返りつつ、「OACIS」の現状を説明し、具体的なコンテンツの収集について教員の協力を得ることを目的とする。

スライドの内容はリポジトリの概要説明と他機関の先行事例紹介、「OACIS」の経過説明。登録のメリットを強調して論文ファイルの提供を依頼。その際、出版社版と著者最終版の違いを理解してもらう。また、実際にファイルを提供してもらう際の基本的な FAQ を用意する。最後に「OACIS」の準備ページの URL と連絡先を伝える。実際の訪問では、論文リストをあらかじめ作成しておいて渡すようにする。

②助言

- ・訪問の目的は最初に説明し、状況設定の趣旨が正確に伝わるようにするべきである。
- ・個別訪問で 15 分の設定なら、うち 5 分を説明に当て、あとは実際の画面を見てもらって具体的なイメージをつかんでもらうのがよい。
- ・ダウンロード数など統計情報を公開するのは善し悪しである、というコメントがあった。
- ・既存の分野別リポジトリについてと、ファイル形式の変換（PDF がなくなったらどうするか？）についての質問があった。

③改訂部分

- ・昨年度の経過説明、他機関の先行事例紹介は省き、論文のファイル提供に関するものに絞った。研修終了後、多少状況の進展があったので、スライドの見出しを大幅に変更することで構成を変え、現状を簡単に説明できるようにした。
- ・配布した論文リストの裏に、担当部署の連絡先、「OACIS」準備ページの URL、学会・出版社の対応を調べるサイトとして、SCPJ と SHERPA/RoMEO の URL、国内のリポジトリ数、主だったリポジトリの URL を載せた。

(3) リハプレゼンの概要（日時、場所、発表者、発表対象、参加人数）

- ・日時：2007年10月31日（水） 10：30～
- ・場所：越中島キャンパス 2号館 712教室
- ・発表者：馬場
- ・発表対象：図書館職員（館長含む）
- ・参加人数：5名

(4) リハプレゼンへの反響（感想等）

- ・内容は概ね理解できた。
- ・盛り込む内容としてはこれで十分である。
- ・“10分”と言って15分かかるより、最初から15分と言っておいた方がよい。（10分の予定が15分かかってしまった）
- ・論文リストのリポジトリ搭載可否欄は記号の凡例（○、×、??などの説明）を書いておかないとわからない。
- ・著者最終版や出版社版の説明（スライド6～7）では、著者最終版に○が付いているものと出版社版に○が付いているものと2パターンしかないのに、そのどちらかしか認められていないと理解されてしまう可能性がある（どちらでも搭載可のところもある、ということがわからない）。学会・出版社のリポジトリへの対応は様々であることを、ていねいに説明する必要がある。
- ・学会・出版社の対応が様々なのはわかるが、だいたいのところを類型化して、本学関連学会がどの型になるのか、例を挙げて説明したほうがよい。
- ・現状で既知のことはネガティブなことでも説明した方がよい（例：リポジトリ搭載不可の学会）
- ・実際に訪問する場合は、その教員に合わせて、関連学会や関連雑誌の情報を調査しておくこと。
- ・リポジトリ搭載不可の学会に対しては、学内教員が学会の幹部になっている場合もあるので、搭載可能となるよう、その教員に働きかけることを考えてもよいのではないか。
- ・教員の手間を最小限にするため、リポジトリ搭載可否については慎重に調査すること。

(5) その他

- ・プレゼン終了後に気づいたが、今後発表する論文について、著者最終版のファイル保存と、図書館への送付もお願いしておくべきだった。
- ・具体的な話をしようとする、どうしても長くなってしまうので、時間配分に注意が必要である。
- ・図書館職員は、ある程度リポジトリについて知識があると思っていたが、セルフアーカイブとリポジトリの関係、著作権処理の意味など、どうも曖昧な理解になっているように感じられた。当館は職員も少ないので、本格的にリポジトリに取り組むには全係で仕事を分担せざるを得ない。知識の共有を図る必要があるようである。

以上